

宮原 春美 論文内容の要旨

主 論 文

Mothers' Perceptions of the Sexual Development and Behavior of their Children and Persons with Autism in General

自閉症児・者の性発達と性行動に対する母親の認識

宮原春美、稲富宏之、太田保之、相川勝代、小澤寛樹

ACTA MEDICA NAGASAKIENSIA 53(1): 1-7, 2008

長崎大学大学院医学研究科内科系専攻
(指導教員：小澤 寛樹教授)

緒 言

障害児・者（障害者と略す）のセクシュアリティについては多くの文献で、「障害がある」にせよ「障害がない」にせよ、あらゆる人に生まれつき与えられていると述べられている。しかし、障害児が思春期に入って性的に成熟していく過程では、ほとんどの家族がこれに対応する心の準備がないので、ストレスの多い状態を作り出してしまうものと考えられる。

親が障害者の性発達と性行動をどのように認識するかは子どものセクシュアリティに影響を及ぼすと考えられる。性に関することはプライバシーに関わる事であり、我が国の臨床現場では自閉症児・者（自閉症者と略す）やその保護者と関わる機会をもちながらも、このような調査報告は殆どなされていない。

本研究では、自閉症者の性発達・性行動の実態と親がそれをどのように認識しているかを明らかにする。

対象と方法

対象は研究に同意が得られた長崎県保健所 4 カ所と日本自閉症協会長崎県支部主催の研修会に参加した知的障害者の家族 172 人である。今回の分析対象は「6 歳以上の男性自閉症者の母親 71 人」とした。調査期間は 2004 年 4 月から 2006 年 3 月であり、研修会参加者を対象に集合法による自記式質問紙調査を行った。

調査内容は、自閉症者については年齢、障害名、障害の程度、二次性徴、マスターベーション、異性への関心の発現時期、性的問題行動の有無などである。母親は年齢、障害者の性発達と性行動に対する認識、夫婦関係満足度、ソーシャルサポート等について調査した。

自閉症者は療育手帳 A を取得しているものを重度群、B を取得しているものおよび取得し

ていないものを非重度群に分類した。夫婦関係満足度は諸井の夫婦関係満足度尺度を用い、18点未満を低得点群、18点以上を高得点群とした。

また母親が障害者の性について、どのように認識しているかを知るために、障害のある人もない人と同じように「マスターベーションをするのは当たり前である。」「恋愛をするのは当たり前である。」「結婚をするのは当たり前である。」の3項目について、障害者に対する一般的認識と我が子に対する認識について、それぞれ「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」で問い、両方とも「そう思う」と肯定したものの割合を分析した。

年齢、二次性徴・性行動の発現時期等は Wilcoxon 順位和検定を、子どもの性行動、母親の夫婦満足度、ソーシャルサポート等は Fisher の直接法を用いた。

結 果

子どもの障害の程度は重度群 41 人 (57.7%)、非重度群 30 人 (42.3%) であった。重度群の「異性への関心」の発現時期は非重度群より約 24 か月遅く、明らかに差があったが ($p=0.031$)、ひげ、性毛、変声、ペニスの発育などの生理的な発達では両群に差はなかった。性行動については、子どもの月齢が 120 ヶ月以上で分析し、重度群の方が「マスターベーション有り」が有意に多かった ($p=0.014$)。性的問題行動では、「人前で性的なことを言う」($p=0.018$)「好きな女の子を追いかける」($p=0.058$) が非重度群に多かった。

障害者の性発達と性行動に対する母親の認識では、マスターベーションは両群とも約 80% が肯定で有意差はなかった。しかし、恋愛、結婚については重度群が肯定の割合が有意に低かった ($p < 0.001$)。

夫婦満足度と認識との関連では、恋愛については低得点群が高得点群より肯定の割合が少なくなっていた。マスターベーションと結婚では差がなかった。

障害児・者の性発達と性行動に対する母親の認識とソーシャルサポートの関連は認められなかった。

考 察

自閉症者の性発達は先行研究と同様に生理的には障害の程度による差は認められなかった。性行動では差が認められ、マスターベーションや異性への関心に関するものであった。マスターベーションは自己完結型の行動であり生理的レベルの行動といえるが、異性に関心を示すことはある程度の対人関係能力と言語発達が必要であり、心理的レベルの性行動と考えられる。一般に性行動は生理的レベルから、心理・社会的レベルへと発達する。重度群の性行動は生理的レベルであったが、非重度群は心理的レベルまで発達していたと言える。

性発達と性行動に対する母親の認識では、マスターベーションに対しては両群とも約 8 割が肯定的に捉えており、生理的なレベルの行動として母親は現実的に認識していたものと思われる。しかし、恋愛や結婚は自閉症当事者のみの問題にとどまらず、心理・社会的な側面を考慮する必要がある。そのため重度群の母親は子どもが性的に発達する存在とは捉えにくいものとする。夫婦満足度と認識との関連では、マスターベーションと結婚では関連は認められなかったが、恋愛については低得点群が高得点群より肯定の割合が少なくなっていた。親の関係が充足され幸福であるか、不幸であるかは子どもの性発達と性行動に対する母親の認識に影響を及ぼすと言われており、恋愛はこのことが反映したものとする。

結 論

自閉症者の性発達は生理的には障害の程度による差はなかったが、性行動では差が認められた。また、母親の認識は子どもの障害の程度、夫婦満足度によって違いが認められた。

われわれ医療従事者はそのことをふまえながら、障害者や家族に関わる必要がある。